

時代の葉 TOKI NO SHIORI



自由な校風が育んだ2人の感覚

ちひろ美術館常任顧問

松本
猛さん(70)



『慈親わのトットちゃん』に、さんからお手紙をいただきました。ちひろのファンで、心中にもりつたりなので、よく文章に含ませてうちのおふくろが絵を描いたと思われる方がいるのですが、そうではありません。ちひろが55歳で急逝した折に、「いつか会える」と思っていたのに……」と黒柳

最初からイメージがあったようですが。その後、絵を借りたいと言われて、9500点の遺作の中から一緒に選んだのです。

四十数年前の話ですが、印象深い日々でしたのでよく覚えていま

す。「窓ぎわのトットちゃん」の連載が月刊誌「若い女性」が始ま
り、黒柳さんは「ザ・ベストテン」という夜の歌番組が終わって
から、自分で車を運転して東京都練馬区の美術館に来られました。
挿絵選びはいつも深夜で、美術館の事務室で原稿を書いていたこと

入って使いたいからと、「原稿は
犬だけれど、猫にも会ったから」と、原稿を書き換えたこともあり
ました。

実はちひろが通つた東京府立第六高等女学校も、トモエ学園のよ
うな自由な校風だったんですよ。きれいなものが好きで、モノがな
い時代にも、麦わら帽子にリボンを付けておしゃれを楽しんだ。そ
ういう感覚が黒柳さんと重なつて
いるんです。会えていたら、きっ
と話が合つたことでしょう。

◇次回は『路上観察学入門』の予定です。

「窓ぎわのトットちゃん」 黒柳徹子 1981年刊

◀◀学校教育のあり方

東京・JR国立駅からほど
近い国立音楽大学付属幼稚
園。園庭には小川を巡らせ、
メダカを飼うなど自然に触れ
る機会を大切にしている。



黒柳徹子さん ©田川俊太郎

窓ガラスの工芸 (講談社)



■メモ 著者が通った小学校トモ工学園での日々をつづった自伝的作品。出版40周年の今年で80万部を超える戦後最大級のベストセラー。中国語、英語、韓国語など2言語に翻訳され、内外合わせると2300万部超。著者朗読のオーディオブックも配信中。

A watercolor illustration of two children walking away from the viewer. The girl on the left has short blonde hair and wears a white dress with a red sash, red shoes, and a red backpack. The boy on the right wears a white hat, a striped shirt, and a brown backpack. They are walking through a field with large yellow and orange flowers. A small brown dog is walking ahead of them to the right.

いわさきちひろ「猫とランドセルをじょった子ども」1969年
（『窓ぎわのトットちゃん』の挿絵から）



トモ工学園の「電車の教室」の授業風景。学園は1937年に創設され、45年に空襲で焼失した（『小林宗作抄伝』から）

守り続けてきた。「自然の中
にリズムがあるという教え。
効率的に育つことが良しとさ
れる時代にあって、ゆっくり
でもいい、一人ひとりの子ど
ものリズムを大切にした保育
をしているかを確認するので
す」と林浩子園長は言う。

この小林宗作こそ「窓ぎわ
のトットちゃん」の舞台であ
るトモエ学園の校長先生だ。
「トットちゃん」こと俳優・
タレントの黒柳徹子さん(87)
は「校長先生に会つていな

かつたら今のはいなかつた」と常々語つてゐる。
私立トモ工学園は戦時中、東京・自由が丘にあつた。但童約50人、教室は古い電車の車両、時間割がない一風変わつた小学校だつた。そこへ、公立小学校を退学させられたトットちゃんが入学してくるところからお話は始まる。
かつて読んだ印象は、みんなどこか違う型破りな女子が優しい先生やお友達に出会つて成長する愉快な物語だ

つた。実際、トットちゃんはトイレに落とした財布を汲み取り口で捜したり、小児まひの同級生を木に登らせたり、やることがハンパない。今読み返すと、小林校長がハンデイがあっても運動会で一等賞になれる競技を工夫するなどどの子にも輝ける場所をさりげなく作ってくれていた学校だつたことがうかがえる。

朝日新聞は家庭面で連載を構え、戦後最大級のベストセラーの背景を掘り下げた。児童学の専門家は「今の教育は勝つ者と負ける者を選ぶ競争原理のうえに成り立っていて息苦しい。だからこそ、『トットちゃん』の自由な世界にあこがれ、みずみずしい子どもらしさにひかれたのでしよう」と分析した。

たるものある」との出版関係者の見方も伝えた。

登校、暴力などの問題が顕著化した。「知識習得のみで卒業化し、落ちこぼれる生徒は列化し、校則強化で管理した。女子は将来の選択肢が少ない分、さらに抑圧されていたと思う」と清水教授は言う。

連載によると、トットちゃんブームの火付け役は「30歳前後の若い母親」（講談社）。彼女らは「自分のことになる」とリアリスト。子どもは塾にやり、教育の過熱をもたらし